

来賓挨拶

著者	春山 浩康
雑誌名	人文社会系分野における研究評価 : シーズからニーズへ : 研究大学強化促進事業シンポジウム報告書
ページ	10-11
発行年	2019-03
URL	http://hdl.handle.net/2241/00155093

来賓挨拶



春山 浩康

文部科学省 研究振興局振興企画課 学術企画室長

ただ今、ご紹介ありました文部科学省研究振興局の学術企画室長を務めています、春山と申します。本日の開会にあたりまして一言、ご挨拶を申し上げます。先ほど人文学と社会科学の研究を評価する指標について、理事の木越先生からのご紹介もありました本日のシンポジウムですが、その評価を受ける立場と評価をする立場、出版やデータ提供を担う立場の、研究評価に関わる立場からのご発表とご議論があると承知をしています。

人文学と社会科学の研究評価につきましては現在、日本学会会議のほうでもその在り方を考えようと議論が進められています。本日のこの会のように、研究コミュニティのほうで多角的な議論が行われることは大変、意義が深いことです。文部科学省におきましては、人文学と社会科学の果たすべき役割は、現代においてこそ大きいとの認識の下に、科学技術学術審議会の中に学術分科会があります。その下にワーキンググループを設置して、集中的な検討を行ってきました。

先日、その審議のまとめを公開しました。本日、冊子としてお配りしている資料の中にも挟んであります。これは概要です。URLが載っていますので後日、お時間があるときにでもご覧ください。

本日のテーマは、研究評価指標についてです。今までご紹介もありましたように人文学と社会科学におきましても、自然科学と同様に論文数や被引用数のサイテーションベースの評価指標が採用される傾向があります。今、お話しがあったとおりです。

しかしながら、このような評価指標は分かりやすいところもありますが、それだけでは研究の質を多角的に捉えることができるのか。パラダイムシフトを起こすことができるような研究の創出といったことに将来的につながるのだろうか。これは人文社会に限りませんが、学術研究全体の課題として考慮していく必要がある課題だと認識をしています。先ほどご紹介しましたワーキンググループにおきましても、議論の焦点ではありませんでしたが、指摘がありました。

特に人文学と社会科学についての評価とのことで、その特性として書籍の刊行も論文と並んで、この分野においては成果発表の重要な手段となっています。また、論文のテーマや内容はそれぞれの国や分野、社会のコンテクストの違いが前提になっている部分の要素が非常に強いです。そのために論文が採択されること自体の意義が異なってくる場合があります。さらには、論文が公表されてから引用のピークを迎えるまでの期間が長い傾向があります。このような特徴が、この分野について指摘をされています。

このような研究成果の公表の在り方や評価基準を標準化することが難しい人文学と社会科学の評価につきましては、自然科学との違いは十分に考慮されるべきところです。その一方で、人文学と社会科学の特異性ばかりが強調されることであってもいけません。そのような議論がワーキンググループの中でもされています。評価については中長期的な検討が必要であると、このワーキングのまとめとしては整理をされました。

改めて申し上げるまでもありませんが、人文学と社会科学の研究評価は非常に難しいテーマです。本日のシンポジウムのような機会が議論の展開には大変、有意義なものだと認識をしています。本日の議論を通じて、コミュニティー全体としての議論がいつそう進展し、人文学と社会科学のさらなる発展につながる契機となることを祈念しまして、開会にあたりましての私からのご挨拶いたします。ありがとうございました。